

23. 受容・共感

生活科では、子供が感じたり、考えたりしている中身を共感的に受け止め、理解する「あたたかい目」による評価が大切であると言われています。何よりも大切なのは、教師が子供の思いや願い、活動の状況などを丸ごと受けとめ、子供のすばらしさに素直に感動し、受容・共感できるということです。

受容・共感とは

『受容・共感』とは、広辞苑によれば、

『受容』…受け入れて取り組むこと。

『共感』…他人の体験する感情や心的状態、あるいは人の主張などを自分も全く同じように感じたり理解したりすること。

とある。

生活科や総合的な学習の中では、支援のスタンスの一つとして使う。

受容・共感をスタンスとした支援では、まず、子供の思いや願いを受け止めるということが大切である。子供に寄り添いながら、活動の意味することや発言の裏にある心情などを察していくのである。そして、このような評価をもとに、子供へのことばかけや環境や活動の構成を考えていくことが必要である。

生活科や総合的な学習では、子供の活動の過程をしっかりと捉え、子供と受容的・共感的な関係を創り上げることが何よりも大切である。そうすることによって、子供は、安心して自分を発揮し、主体的に生き生きと活動することができるようになるからである。

—— 実践から ——

受容的・共感的なかわりにおいて、子供は安心して「・・・してはどうだろう?」「・・・するにはどうしたらよいのだろう?」などと相談をもちかけたり、教師のアドバイスに耳を傾けたりするようになります。そして、教師はそうした子供の姿に期待の目をもち、もう一歩先の成長を支えようとします。受容的・共感的な関係は、実際のかかわりとして具体化されるなら、子供を受け入れるだけにとどまらず、「がんばってほしいーがんばろう」という「期待ー挑戦」の関係へと発展していく契機となるものと言えます。